ぴか！創

令和４年度　図工・美術部報
発行：３月３日（金）

美しいものや自然に感動する心

岡崎市現職研修委員会図工・美術部
部　長　　細井　鶴貴

本年度の図工・美術部の活動も無事終えることができました。図工・美術主任の先生方におかれましては、各学校の図工・美術科の日々の授業づくりや「造形おかざきっ子展」等、様々な場面においてご尽力いただいたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。本部会の温かい雰囲気の中、互いに助け合いながら多くの課題に果敢に取り組み、仕事を進めていく先生方の姿を見るたびに、私は嬉しい気持ちになりました。

さて、子供の学びを止めず、コロナ禍でもできることを工夫して実施した令和４年度でありました。日々の授業実践においても苦慮の連続であったことと察します。その授業の中で、特に私が大切にしたいと感じていることは、子供の感性を育み、磨くことです。「美しいものや自然に感動する心」の育成は、芸術教科ならではの特質であります。視覚、触覚等五感をフルに活用した実体験を授業や行事等で取り入れ、児童生徒の心を豊かにしていきたいものです。それが、将来豊かに生きていくことにつながっていきます。

本校１年生の授業では、ウコッケイと遊び、触れ合う体験からウコッケイのイメージを広げ、自分の思いに合ったウコッケイを描きました。「ける力が強い、だから爪を鋭くしたい」「足はもっとしわしわだ」「羽をふわふわにしたいけど」と自分の思いが膨らみます。子供たちの思考は活性化され、自らの思いや意図を作品に投じ、描き方の工夫をするようになります。主体的な姿がそこにはあります。子供が夢中になっているときは、素敵な表情を見せています。本部報の表題のごとく、まさに「ぴか！」と輝き、創り続ける姿です。

終わりになりますが、本年度の図工・美術部に関わる教育活動にご理解とご協力をいただけたこと、ありがとうございました。また、「造形おかざきっ子展」を通して身に付けた教師としての指導力や専門的な力をそれぞれの立ち場で生かし、岡崎の子供たちの誰もが、美しいものや自然に感動する心をもち、豊かな生き方ができるようになることを願います。

今年度の指導員訪問を振り返って…

北中学校　堀口　宏章

主体的・対話的な活動の中で子供が楽しく表現活動や鑑賞活動に取り組めるよう工夫した実践を多くの学校で見ることができた。ある小学校では、色の付いたシャボン玉を画用紙に写し取ってできた模様を基に、表したいことを見つける見立て遊びの授業を行った。導入で教師が実際に見立て遊びを行った三つの参考作品を提示すると「僕は〇〇に見えたよ」「私は△△」と、思い思いの見立てを発表する子供の姿があった。活動への期待感が高まったところで、教師は、三つの参考作品が実は、向きを変えた同じシャボン玉模様からできているという「しかけ」を子供に伝えた。子供は「すごい」「先生にだまされた」と、うれしそうに声を上げ活動への意欲を高めた。教師が設けた「しかけ」が子供の好奇心を掻き立て、主体性を育む授業となった。このように、図工・美術科では、子供が主体的な活動を通してさまざまな学習体験を重ね、学びの意義を見出しながら資質・能力を養うことができる授業を目指していきたい。

六ツ美北中学校　中根　勅子

今年度の訪問では、中間鑑賞会にチーム学習を取り入れ、自分の作品コンセプトを説明し、互いの作品がよりよくなるようにアドバイスし合う授業が多く見られた。「どこからそう思ったの」「なぜその色にしたの」という子供の考えを引き出す教師のファシリテートにより、子供が自ら考え、根拠をもって意見を述べることができた。

また、絵画作品やアートカードを用いた対話型の鑑賞活動により、感じたことを伝え合う中で、他者の見方や感じ方に触れ、自分の見方や感じ方を広げ深める姿となった。

図工・美術科は、「作品をつくる」ことに主眼を置きがちである。「つくることを通して何を学ぶのか」「どんな力が身に付くのか」という視点をもち「何を描くのか」「何をつくるのか」を考える必要がある。また、学習指導要領では、知識を確実に習得して活用できる基礎教育の必要性を訴えている。表現及び鑑賞の授業の基礎となる知識を効果的に学べる授業が小学校では「造形遊び」である。中学校においても、多様な材料に触れる経験を積むことで知識を増やし、表現活動の過程を大切にした授業づくりを目指したい。

愛知県造形教育研究会　協議会・講演会

「教材を見つめなおす」～愛造研を通して～

六ツ美中学校　加藤　朱実

令和４年 11 月 11 日（金）、令和４年度愛知県造形教育研究会総会及び第 57 回愛知県造形教育研究協議会が、岡崎市総合学習センターにて開催されました。

研究協議会では、三人の先生方による研究発表があり、小学校、中学校を問わず、タブレット端末などＩＣＴ機器の導入を手立てにされており、実践が身近に感じられました。また、後半は愛知教育大学准教授である永江智尚先生による「タブレット時代に絵筆の教育は必要か」と題した講演会が開催されました。まさに、我々が今後ぶつかるであろう問題を先取りした内容だったように思います。

先生のお話の中に「絵筆の使い方を教えるのではなく、絵筆で何を教えるかが大切。」とのお言葉がありました。答えをいただいたような気がしました。絵筆に限らず、どの教材や教具であっても、これらをどう生かして学びに結びつけるのか、常に回帰する必要性を改めて感じました。

10 年ごとに学習指導要領は新しくなっています。時代の流れや変容を柔軟に受け入れつつ、今後、図工・美術科の授業が目指すものは何か、何をどう教えるべきかを考えながら、ＩＣＴ機器等を上手に活用し、日々の実践に取り組んでいきたいと思いました。

今春、ご退職される図工・美術科の高橋　誠先生にお言葉をいただきました

「勘考（かんこう）して拵（こしら）える」

六ツ美北部小学校　校長　高橋　誠

「おかざきっ子展の回数が、年齢の１つ後を追って来る」のが私。誰も言ってくれないが、自分では秘かに①野外活動②ソフトテニス、そして③図工・美術の「リアル三刀流の教師人生」だった、と称えている。

父が昔、革靴職人で家には工房があった。在所のおじさんは大工で、別の親戚のおじさんは看板屋だった。きっと幼いころから「何かを作る」ということに、知らないうちにたくさん触れていたのだと思う。紆余曲折あって、国語の免許も持つ、岡崎の図工・美術教師になった。それからは、「『思わず作ってみたくなる』魅力をもった制作に、子供を出会わせたい」一心で、いろいろと新規教材を一から「勘考して拵え」てきた。

「勘考して拵える」とは、「五感を使ってあれこれ思考を巡らせて、手を使い、ねらいをもって何かを形作ること」と、捉えている。「子供の人格形成」も「造形活動」も軸は同じ。「勘」とか「考」、「手」が「存」とか、子供を「育む」「成長させる」＝「**ひとねる**」には、体感覚や肌感覚の経験がたっぷり必要だと思う。

電波と電気がないと文鎮になる「使う」機器が全盛の今、リアル造形物を「作る」活動は岡崎の未来を担う子供のための最先端活動であると考える。「子展」の音色はストラディバリウス。他ではもう再現できない魅力をもつ。常に最高で最新をこれからも。